琉球大学学術リポジトリ

グローバル津梁プログラム副専攻
ー高等教育のイノベーションを目指してー

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2022-05-19 キーワード (Ja): グローバル, 大学の国際化, イノベーション, 質保証 キーワード (En): SDGs, OECD 作成者: 石川, 隆士 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017945

グローバル津梁プログラム副専攻
－高等教育のイノベーションを目指して－

石川　隆士
国際地域創造学部

要　旨

本稿では、グローバル津梁プログラム副専攻の概要について説明すると共に、本プログラムが備えている、これからの高等教育プログラムに求められる機能についても、その背景を交えながら言及する。

キーワード

グローバル、大学の国際化、イノベーション、SDGs、OECD、質保証

1 はじめに

2018年、前年度の大学の世界展開力事業として採択された、琉球大学の「COIL型教育を活用した太平洋島嶼地域の持続的発展に資するグローバルリーダーの育成」の核となる教育プログラムとして、グローバル津梁プログラム副専攻はスタートした。本プログラムは、琉球大学の英語カリキュラム改革、共通教育改革、国際交流・地域連携の促進等、それまで個別に進められていた事業を統合したものであり、同時にe-learning、Web環境、グローバル・コモンズ等といった、インフラの整備も大きく関わり、長年にわたる構想が大学の世界展開力事業というプロジェクトの下に形を成したものである。その特質として、第一に上げられるのが、質保証である。本プログラム履修者は様々な形でのアセスメントを通じて、修得した能力を可視化される。それは高等教育の国際化にとって不可欠な手続きであり、その意味で本プログラムはグローバル化時代の高等教育のモデルとなる可能性を秘めている。

2 グローバル津梁プログラムの背景

文部科学省の平成30年度「大学の世界展開力強化事業～COIL型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」として、琉球大学は「COIL型教育を活用した太平洋島嶼地域の持続的発展に資するグローバルリーダーの育成」を申請し採択された。COILとはCollaborative Online International Learningの略称であり、e-learning、オンデマンド配信等を含む、ICT技術に基づくグローバル教育の総称である。琉球大学は当該事業において下図のように、「琉大グローバル津梁プログラム」という、すべての学部生が参加可能な副専攻プログラムを立ち上げ、その基幹科目として「グローバル実践演習」を設置し、ハワイ大学システム、グアム大学、パラオ短期大学、ミクロネシア連邦短期大学、マーシャル諸島短期大学の太平洋島嶼地域連携校とのCOIL型教育を活用しながら、当該地域の持続的発展に関する課題を共有し、協働して解決案を探究する教育をスタートさせた。

平成30年度にCOILの活用を導入した本事業の基盤となる大学の世界展開力強化事業の焦点は、

ICTを利用した、国際協働教育の促進、およびそれを刺激とした学生モビリティの増大である。

しかしその前提には、グローバル化時代を迎えた、日本の教育の世界的なプレゼンスの確立、競争力の強化の必要性があり、そのためには明確な学修目標および学習成果のアセスメントといった質保証の仕組みを備えた教育プログラムの設定、そして、複数の機関によるこの枠組みの共有が求められている。こうした日本の教育の世界的プレゼンス確立、その競争力の強化のためにグローバルに共有される質保証の必要性が求められる背景には、課題先進国としての日本の実態がある。課題先進国とは将来にわたってグローバルな課題が先進的に立ち現れてくる国のことであり、日本においてその課題とは、「少子化」と「超スマート社会」に他ならない。日本社会の少子化は当初予想されていた状況よりも加速度的に速いスピードで進行し、いわゆる労働人口の急激な減少および、介護等のケアを必要とする人口のアンバランスな増大が危機的な状況となっており、「国民が国家を支えられない」状況を迎えつつある。その突破口として重要なのが、IoT、AI、シンギュラリティ等、多様な側面で進展を見せるSociety 5.0というICTによる社会革新である。そのため、2018年、中央教育審議会『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）』のヴィジョンとして、「学修者主体の質保証」、「少子化への対応」、「地域との連携」を打ち出した。この背景にも、すでに、「少子化」、「超スマート社会」に呼応した環境の変化が関わっており、それが高等教育の変革、しかも急速の変革を要求していることは言うまでもない。環境の変化とは当然のことながら、「急速に進化するテクノロジー」があり、その基盤を共有しつつ「異なる文化等の接触の増大」、「属する国や地域を横断する相互依存関係」である。

この背景を前提として、『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）』が要求するのは「国内→域内→国、地域を越えて展開される『オープン』な教育」および「課題先進国として高等教育機関が「共創」「協創」的に課題解決に貢献すること」となっている。こうした前提の中から、世界展開力強化事業が、その戦略の核として「質保証を伴った国際連携・交流」、「教育プログラムの国際通用性、競争力の向上」、「日本の高等教育のプレゼンス向上」を掲げ、『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）』と前後してCOILという手法が、そのソリューションとして提示されるのは自明のことと言える。

琉球大学としては2018年に策定された国際戦略基本方針のヴィジョンとして、「地域と共に豊かな未来社会をデザインする大学」および「アジア・太平洋地域の卓越した教育研究拠点となる大学」を掲げ、その具体的戦略として、「TIMES(Tropical Marine, Medical, and Island Sciences)における国際共同研究の促進」、「沖縄や日本、世界で活躍できるグローバル人材の育成」、「沖縄県系人ネットワークとの連携」、「『環太平洋大学コンソーシアム』のネットワーク形成」、「戦略的な構想による海外拠点の設置」を設定した。琉球大学が設定した個別の戦略を、『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）』に融合させる形で創出されたのが、「COIL型教育を活用した太平洋島嶼地域の持続的発展に資するグローバルリーダーの育成」という事業案であり、その意味で将来にわたる高等教育の変革のモデルとなるすべての要素がそこに含まれている。

2 グローバル津梁プログラムの学修目標

太平洋島嶼地域に位置する琉球大学の特色を前面に打ち出した世界展開力強化事業の柱は、

「太平洋島嶼地域における教育研究連携」と「COILを通じた質保証の国際通用性向上」である。前者においては国連の持続的開発目標SDGsにおいて、脆弱な地域の一つである太平洋島嶼地域の課題共有、解決に向けての協働が主軸となり、後者においては質保証を伴った教育プログラムの設定が主軸となる。そして、前者における太平洋島嶼地域における持続的発展に向けた課題解決を含みつつ、それを普遍的なものへと再編成したのが、グローバル津梁プログラムの学修目標である。

この学修目標は3本柱から成り立っており、一つは言うまでもなくグローバル社会で生き抜くための英語力、2番目がOECDの育成能力と対応させたグローバル・コンピテンシー。このグローバル・コンピテンシーはさらに、「新価値創造」「対立緩和」「信頼性構築」という3つの下位区分をもつ。最後に持続的発展について、2030年までの目標として国連によって掲げられたSDGsを設定した。そして、それぞれの発達段階を、認知から行動、主観から客観、個人から社会へという普遍的な成長段階に沿う形で、「レベル１：知識と理解」、「レベル２：応用と分析」、「レベル3：独自性と構造化」。「レベル4：クリティカルシンキング」として設定した（図1）。

図1　グローバル津梁プログラム学修目標

この学修目標を達成するために、構成されるのが教育カリキュラムであり、その修了要件およびその概念図は以下の通りであり、必修・選択必修科目等を通じて英語運用能力、グローバルコンピテンシー、SDGsが修得される仕組みとなっている：

「グローバル津梁プログラム修了要件」

① 必修科目（グローバル・コミュニケーション・スキル）

22単位

（グローバル実践演習Ⅰ～Ⅳ、大学英語、英語購読演習中級、 英作文演習中級、英語プレゼンテーション演習中級、グローカル・リーダーシップ論I、グローバルSDGs概論）

② 選択必修科目（自分の学系の1単位を含む計2単位）

ヒューマニティ系　　ヒューマニティ系SDGs演習

マネジメント系　　マネジメント系SDGs演習

ライフサイエンス系　ライフサイエンス系SDGs演習

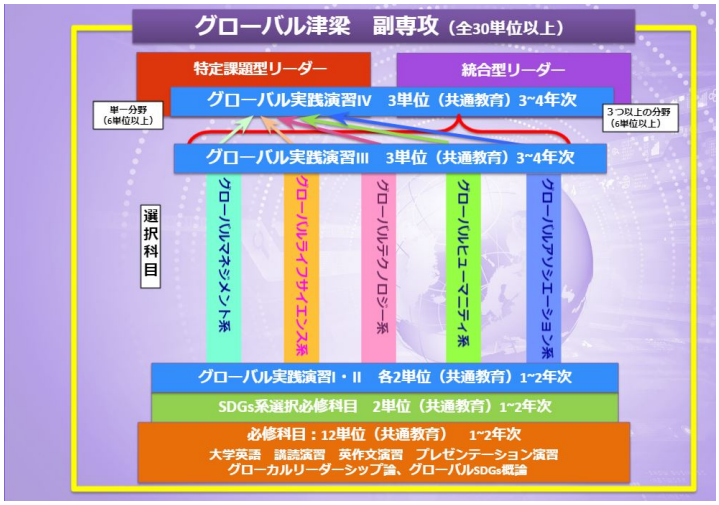
エンジニアリング系　エンジニアリング系SDGs演習

アソシエーション系　個と多様性

③ 選択科目（特定課題）　6単位

（科目リストから科目を選択し､統合型コースもしくは 特定課題型コースのどちらかで履修を行うこと）

④ 海外渡航（大学入学以降、最低一回の海外渡航を必要とする）



（図2　グローバル津梁プログラム概念図）

３ グローバル津梁プログラムの質保証

本プログラムの学修目標とカリキュラムの関係において、重要かつ本質的な問題は、個々の科目のパフォーマンスおよびその評価をいかにプログラム全体の学修目標へと統合していくか、あるいは、その逆でプログラム全体の学修目標をどのように個々の科目の活動へ割り当てていくかということである。残念ながら、プログラム全体と個別の科目の対応関係を完璧な形で構築することは不可能であろう。したがって、その対応関係を緩やかな形でまとめ上げる、評価の配点の枠組みを図3のように設定した。

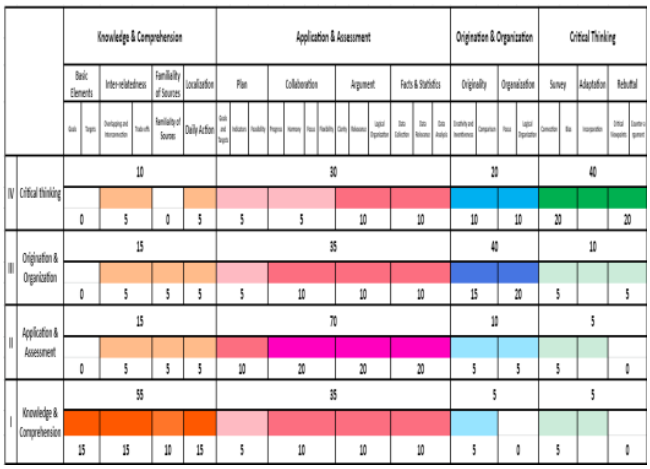


図3　評価マトリクス

この質保証の仕組みが、今後の高等教育の変革、国際化にとって重要であることは冒頭で述べた通りである。本プログラムの運営を通じて、今後の参考となるような情報が提供できれば幸いである。

引用文献

中央教育審議会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm（参照2021-05-20）

文部科学省「大学の世界展開力強化事業」
https://www.mext.go.jp/en/policy/education/highered/title02/detail02/sdetail02/1373893.htm（参照2021-05-18）

琉球大学「COIL型教育を活用した太平洋島嶼地域の持続的発展に資するグローバルリーダーの育成」
https://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/data/shinsa/h30/h30tenkai_chousho_a6.pdf（参照2021-05-22）